慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『松竹物語 下』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.47 (2008. 6) ,p.100- 102
JaLC DOI	10.14991/002.20080600-0100
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20080600-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『松竹物語　下』解題・翻刻

石川　透

解　題

『松竹物語』は、江戸時代前期に、奈良絵本・絵巻に仕立てられて享受された代表的な作品である。その伝本の数は多く、私も『室町物語影印叢刊』一一に紹介した絵巻を始め、いくつか所蔵している。

今回紹介する絵巻は、下巻だけのものであるが、やはり、朝倉重賢筆の作品と思われる。本文的には、二巻仕立てであることが示すように、広本系の内容である。

『松竹物語』の内容は以下の通りである。

懿徳天皇の時に、宮崎の岩根山の麓に住む夫婦が、谷の水を飲んで、千年の齢を保っていた。帝はその話を聞き、行幸して谷の水を飲んで長寿を全うした。やがて、夫婦は神と現れ、その社にめでたい松と竹が生えた。

本書の書誌は以下の通りである。

所蔵、架蔵
形態、絵巻、一軸
時代、〔江戸前期〕写
寸法、縦三二・四糎
表紙、後補紺地金繡表紙
外題、なし
内題、なし
料紙、下絵入り斐紙
奥書、なし
挿絵、四図

以下に、『松竹物語　下』を翻刻する。翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。なお、内部の錯簡は直して掲出した。

〔松竹物語・下〕

〔挿絵・第一図〕

されとも、みかとは、かの国は、もとより、人わうのむまれ

給ふくになり、神代のあとも、ゆかしくおほしめされけれは、身つから、かしこに、みゆきまし〳〵て、ゑいらんありたくおほしめせは、かたしけなくも、みかと、御けかうまし〳〵けり。

すなはち、岩ねやまに、みゆきなりけれは、かのふうふの人は、おほきによろこひ、かしこより、いほりのうちのちり、かきはらひ、こけのむしろをきよめて、玉座をかまへつゝ、みかとをすへたてまつりけり。御まへには、木のみ、かやのみ、めつらしきものともを、そなへ侍りぬ。

みかとのおほせには、「ふうふ、もろともに、よはひを、ひさしくのへしゆらいを、くはしくそうすへし」と、の給へは、ふうふ、こたへてまうさく、「われらは、神代より、このところに侍るなり。上古には、このくにゝ、五こくのたくひもさふらはす。をのつから、山のこのみをしよくし、たにのみつをのみて、とし月を暮し候」と申す。

［挿絵・第二図］

「さて、そのこのみ、水のあちはひ、世にこえて、めてたき事侍りや」と、の給ふに、「さして、かはれるきみ、ありともおほえ侍らす。むかし、このやまへ、天より、かんろふりくたる。そのあとに、くこと申草生したり。そのくさ、おほきにはひこりて、はやしとなれり。そのはやしの露、したゝり、たにゝなかれて、をのつから、くすりの水となり侍るなり。されは、いまの世にも、天より、かんろふるとみえて、かのたにのみつ、あまく侍る事、おり〳〵に侍るなり」と申す。

「さらは、かのたに川を、ゑいらんあるへし」とて、ふう婦のものを、さきにたてゝ、みゆきありけり。ゐんりんたるくこのはやしを、わけゆきて、岩のかとをかゝへて、おり給へは、たにのみつをと、たう〳〵たり。

ふう婦、水をむすひて、こゝろみ申やう、「けふしも、天より、かんろの、くたりけるにや。このみつ、れいならぬ、あちはひに侍り」と申す。

みかと、あやしくおほしめし、むすひあけて、きこしめすに、「けにも、あちはひ、よのつねならす。天のかんろのあちはひ、これやらん」。御こゝろもはれやかに、御身もかろく、たちまちに、わかやかせ給ひけり。

みかとのおほせには、「このくに、はしまりてのち、草木の物いふことは、ありといひし、神の御代にも、かほとのふしき、ありといふことをきかす。もろこしは、ひろきくにゝて、しかも、ひさしき世を、すくしきたりといへは、さこそは、かやうのふしきもありつらめ」と、の給へは、ふうふ、うけ給はりて、「もろこしに、しとうと申せん人は、なんやうけんの、きくよりしたゝるたにみつを、のみてこそ、長生不老のせんしゆつをは、たもち侍りけり。又、このくこをしよくして、よはひをのへたりしゆへ侍るによりて、くこをは、せん人ちやうとも、名つけ侍るなり」と申す。

みかと、の給はく、「なんちらは、たゝ人ならねは、なに事も、よく、そらにおほえたるらん。いにしへの事こそ、ゆかしけれ。くはしく、そうせよ」と、のたまへは、ふう婦、うけたまはりて、「ちはやふる、神の御代は、すなほにして、ことのこゝろ、わきかたく、これそとさして、そうすへき事も侍ら

す。しんむ天皇、うとのいは屋にての、御たんしやうよりこのかた、みやさきのこほりにて、はしめて、あまつ日つきのくらゐに、つかせ給ふ御事なとは、このくにゝて候へは、まのあたりに、みたてまつりぬ。そのゝち、たうこくに、五十九年おはしまして、とうせいし給ひつゝ、あし原のなかつくにに、とゝまり、うねひ山、かしははらの宮こを、はしめ給ふ」事なとを、くはしくそうし侍れは、みかと、かしこくかんし給ひて、いろ〳〵のたからものを、ふうふに給はりける。

「今は、宮こにかへり給ふへし。なんちらは、年〳〵に、かんろのみつをくみて、みやこにたてまつれ」とそ、の給ひける。

［挿絵・第三図］

そのゝちは、たひ〳〵、ちよくしをくたし給へは、ふう婦、かんろの水をむすひをきて、たてまつりけり。みかと、この水を聞しめしけるゆへに、御よはひ、わかく、うるはしくなり給ひて、長生をたもち給ふ事、いく久しかりけり。

そのゝち、おほくのとし月をへて、かのふうふの人〳〵、ゆくかたしらす、うせにけり。さと人も、あやしみをなして、こゝかしこ、たつぬれとも、つゐに、あひえす。くたんのいほりのかたはらに、一夜のうちに、松と竹と、一本つゝ、おひいてたり。

人〳〵、あつまり、これをみて、「かゝるいはほのかたはらに、にはかに、松竹のしやうすへきやうやあるへき。これは、いかさま、かのふう婦の人〳〵の、へんけし給ふなるへし」とて、をの〳〵、かつかうし、手をあはせて、おかみけり。

さて又、宮こには、みかとの御夢に、かのふうふのもの、まみえたてまつり、「このしやは世かいと申は、ゑとのさかひなれは、つゐには、なからへはつへからす。今よりは、とこしなへに、みかとを、まもりたてまつらんために、神と現し侍るなり」とて、一首の歌に、

岩ね山いはねにおふる松竹の
おひそふまゝにすゑ久しかれ

と詠して、かきけすやうに、うせにけり。

御夢さめてのち、あやしくおほしめし、やかて、かのくにゝ、ちよくしをそ、立られける。あたりの里人とも、ちよくしの御けかうを待えつゝ、事の次第を、くはしく申せは、「扨は、うたかふ所なし。この松と竹とこそは、かの二人の神たいなりけれ」と、ちよくしも、かつかうし給へり。

されは、「十八公の気は、霜ののちにあらはる」とて、松は、君子のとくをしめし、霜雪にも、いろをへんせす。千年のみとりは、ときは也。竹、また、その色、松にひとしうして、しかも、霜にもおかされす、よはひ久しき物也。

すなはち、その所に、やしろをたて、あけの玉かきをゆひて、ふうふを、神にいはひ奉られけり。岩根の宮と申は、是也。されは、しゆみやうをねかふ人は、このやしろにまうてゝ、いのれは、そのくはん、たちまちかなひて、長生をたもちけり。

今の代にいたるまて、めてたきためしに、松竹をいはふ事は、此時よりそ、はしまれるとかや。

［挿絵・第四図］